

書評

河竹繁俊著『人間坪内逍遙』

本間久雄著『坪内逍遙』

服部嘉香

昭和三十四年五月二十二日は、坪内逍遙の生誕百年に当るので、早稲田大学を始め各所でいろいろ記念の催しがあったが、同日附を以て河竹博士の『人間坪内逍遙』(副題「近代劇壇側面史」)が、六月十日附で本間博士の『坪内逍遙』(副題「人とその芸術」)が出版されたことは、後世に残る記念として会心事であった。殊に、河竹博士のが、人間としての逍遙を赤裸々に描き、それがおのずから劇壇側面史となっていて、逍遙の功績が語られる間に、明治以来の演劇界、芸能界の波瀾の表裏が、暢達な筆致によって明快に知られることや、本間博士の

論家・劇作家・翻訳家・教科書編纂者・舞

台監督としての多面・多彩の活躍を、同博士一流の博引旁証・用意周密の行文によって詳述されて、おのずから逍遙の人と芸術と時代とが明きらかにされたことは、相並んで逍遙の全貌を知る上に二者択一を許さぬ適時の述作として貴重な意義があった。

河竹博士は、いうまでもなく演劇方面の逍遙を語る第一人者であるが、また、日本の演劇・芸能の大事、小事にわたる百科事典的生き字引である。同書に語られることが立体感ある現実性を以て迫って来るのは当然であるが、特に痛切な一点は、夫人の出身について書かれた一章であった。巻頭第一部の「逍遙の遺書と遺稿——自殺説と夫

人の逝去」がそれで、河竹博士は、まず逍遙没後に噂された自殺説を事実を挙げて否定したあと、逍遙が後代への告白とした原稿紙四五十枚に及ぶ「遺書もしくは遺稿」によって夫人の前歴をみずから明きらかにした文の内容を紹介し、それを中心としてこの「悲壯な夫婦」(河竹博士の言)の忍苦の生涯をまざまざと描き出しておられる。それは、逍遙の生活態度も、文芸活動も、憤いとしてのそれかと思わしめるほどのもので、夫人は憤いとして世に隠れて内助の功を積み、逍遙は、内にあつては、或いは失敗かと思つたであろう結婚も夫人の純情に対する憤いとして一夫一婦を以て貫ぬいた健全生活を建設し、外に向かつては近代劇壇側面史としての河竹博士の詳悉を極めた記述のあとを見ても、一種の憤いと

して、書中引用の金子馬治のいう通り、「明治大正の新文化の指導者として、……言葉通り、すて身になって勇往邁進にさらされた」ことが解る。「すて身」とあるところに、何となく言外のひびきが感ぜられる。

本書の第五部には、「文芸協会前後」に

始まる高田早苗・金子馬治（筑水）・島村抱月との交渉について詳しく書かれているが、その中に、抱月と松井須磨子との間に取り交わされた三通の誓紙が公表されている。逍遙遺書の内容紹介と、この原文のままの誓紙公開とは、当先生を知るわたくしには、二三夜の不眠をもたらしたほどの感動であった。何か大きな、複雑で深刻な人生というものを感じさせるものがあつた。この二つは本書の抒情詩の面である。これに対する叙事詩の面は、こういふあからさまを以て、本書の大部分を占める第二部から第四部まで、私人として、公人としてこの逍遙、特に演劇面の逍遙の活動が、細大共に掌を指すように浮彫にされたところであろう。逍遙の信實厚く、晩年の十年がほどは形影相伴なう間柄であつた上に、逍遙の日記その他の文献が演劇博物館に保存せられ、河竹博士自身もまた綿密にメモを取っておられたので、すべてが立体的な現実感を以て活写されているのである。繰り返し読むうちに、——本間博士の書と読み合わせれば尚更であるが、——逍遙の業績のすべてが、独創的・画期的・進歩的・先見

的・完全主義・第一流主義であつたことが解るのであるが、逍遙はそれを第一義として、全力を傾け、捨て身となり、精根を尽くしたのである。「悲壯な夫婦」ではあつたが、また、幸福な結婚だつたと思うようになっていたのではなからうか。

人間としての逍遙の欺かざるの記として、何度か繰り返し読みつつ、興趣の尽きない書である。（新樹社刊・文京区高田老松町二・B6判定価四二〇円）

本間博士の『坪内逍遙』は、逍遙のこの第一義を学問的に証明されたような立場にある。例えば、書中最も注目すべき論策の一つである「逍遙とシェークスピア」の中に逍遙の伝が紹介されているが、それは、逍遙の心の中に詩かれたシェークスピアの種子が、やがて花を開き実を結ぶためには、逍遙その人が、素質的にか、環境的にか、「シェークスピアを受け入れるに足るだけのものではなければならぬ」という見地から、逍遙の生い立ちを一瞥する必要があるとしてのことであつて、ここに学的用意が窺われるのである。それによると、逍遙は、明治九年、十八歳、県の選拔生となつて上京するまで、二三の学校で英語その他

を学んだが、幼少の頃から、草雙紙・読本など江戸時代の戯作者の作品を耽読し、また、観劇に没頭したことが逍遙の生涯に「決定的影響」を与えたことを指摘されている。学的用意の第二であろう。それはまた、母の感化ないし遺伝と、名古屋の貸本屋大惣に日参しての利用にあつたとされたのが第三の学的用意。更に、こういう逍遙の文芸的教養とシェークスピアとの結びつきは、一つは「時代物又は歴史物の興味との共感」であり、一つは「シェークスピア劇における挿話又挿話という形式が、草雙紙趣味と共通していること」によることを指摘されたのが第四の学的用意。この結果、一面、逍遙は馬琴心酔から遠ざかり、他面「歌舞伎趣味に倣ふことの代りに、いちじるしく比較文学的心構へを採らしめた。」と結論されたのが第五の学的用意となるのである。が本間博士は、以上を序論として更に逍遙の演劇活動の全貌を詳細に分析し、追及していただけるのである。

これは本間博士の学風の一例となるものであるが、ここでわたくしの取り上げたいのは、逍遙が幼から江戸時代戯作者流の作

品を耽読したという点である。それと、河竹博士が問題とされた逍遙の結婚とが、何かの系絡を持ってはいないだろうか。逍遙の文芸活動がその生活態度を反映しているとすれば、之は結婚に根ざすところがあるろうし、それはまた、江戸文学好みに左右されたところがないともいえない。もつとも逍遙の草雙紙・読本の耽読は、結果として馬琴心酔となり、『小説神髓』の実践作品として、新時代文学の見本として勢い込んだであろう『当世書生気質』が、馬琴臭を脱し得ないものがあるといわれたが、そうかといって、馬琴式の品行方正作品でもない。わたくしの考え方は間違っているかも知れないが、ここに、河竹・本間両博士の二著が、二者択一を許さぬ意義の一端が見られると思うのである。

右の『小説神髓』が、明治新文学の鐘鐃であることは、文学史上の定評の通りであるが、本間博士が、これについて、源流は、外国の文学論になく、本居宣長の『玉の小櫛』であるとして、学的分析・追及を試みられた。『小説神髓』源流考』がそれであるが、『神髓』の重要な論旨は、文学は道

徳から独立すべきであるという文学独立論と、真の小説は人情の奥を穿ち、その骨髄を描破するものであって、外面的な描写を以て満足すべきでないとする写真主義論とであって、そのいづれもが、「宣長の文学論に負っていることの大きいことがわかる。」と論断されている。本間博士の新見としてすでに学界に認められているのであるが、一冊の消遙論の中に含まれてみると、特に逍遙の真髓を伝える重要な論策として印象を新たにす。

この外、「役の行者と近代絵画」には、二者の関連について、多岐にわたって詳細に論究され、「逍遙の史的位相」には、逍

川副国基著「近代日本文学論」

標題の書は、川副さんが二十数年間にわたって、折にふれて書き綴って来られた、近代の日本の作家及び作品研究のうちで、まだ本になっていない論稿に、新に書きおろされた「ロンドンの漱石」「パリの藤村」の二篇を加えたもので、年月はおのずから

遙の人生観・芸術観が結論的に説かれているが、巻頭の「業蹟点描」は、逍遙概論として行き届いたもので、特に、史劇論と『桐一葉』、新築劇論と『新浦島』に関する論では、すべての面で、理論と実践を全うした逍遙の論技一体の面目が遺憾なく示されている。

わたくしは、森鷗外は個人として偉大な文豪であるが、逍遙は、文学史・演劇史の開拓に先駆的的使命を果たした偉大な文豪であると感じているが、本間博士が、本書において、逍遙を終始、歴史の上に置いて論攻されたことを、同感を以て感謝したいと思ふ。(松柏社刊・千代田区飯田町一の一六 定価三五〇円)

山路平四郎

なる集積をみせて、B5版・五百頁に垂んとする大著である。

痛烈な人生批判の眼を、一見飄逸な風手で包んだ川副さんの、人となりをよく承知しているわたくしは、この人の少年時代の恩師から、その昔川副さんが郷党から麒麟